

レーニン選集

2

マルクス＝レーニン主義研究所訳



レーニン選集 第2冊 ㊦ 250.

1957年6月25日 初版発行

1958年12月5日 3版発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の15

電話 (92) 3091・7887

振替 東京16387

三晃印刷・田中製本

はしがき

一 この選集は、ソ同盟マルクスレーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクスレーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を削除して編集したものである。

一 翻訳には現行版としてもっとも権威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末に示してある。

一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中「」内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一 訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。

目次

なにをなすべきか？ われわれの運動の焦眉の諸問題

序文……………七

一 教条主義と「批判の自由」……………一〇

(イ) 「批判の自由」とはなにか？……………一〇

(ロ) 「批判の自由」の新しい擁護者たち……………二三

(ハ) ロシアにおける批判……………一九

(ニ) 理論闘争の意義についてのエンゲルスの所論……………二六

二 大衆の自然発生性と社会民主主義者の意識性……………三一

(イ) 自然発生的高揚の始まり……………三三

(ロ) 自然発生性への拝跪。『ラボーチャヤ・ムイスリ』……………三六

(ハ) 「労働者」自己解放団と『ラボーチェエ・デーロ』……………四六

三 組合主義的政治と社会民主主義的政治……………五六

- (イ) 政治的煽動、および経済主義者がそれをせばめたこと……………五六
- (ロ) マルトイノフがブレハーノフをふかめた話……………六六
- (ハ) 政治的暴露と「革命的積極性の培養」……………七〇
- (ニ) 経済主義とテロリズムとはなにか共通点があるか？……………七六
- (ホ) 民主主義のための先進闘士としての労働者階級……………七九
- (ヘ) いまいちど「中傷者」、いまいちど「瞞着者」……………九五

四 経済主義者の手工業性と革命家の組織……………九九

- (イ) 手工業性とはなにか？……………一〇〇
- (ロ) 手工業性と経済主義……………一〇四
- (ハ) 労働者の組織と革命家の組織……………一一
- (ニ) 組織活動の規模……………一六
- (ホ) 「陰謀」組織と「民主主義」……………二三
- (ヘ) 地方的活動と全国的活動……………二四

五 全国的政治新聞の「計画」……………二五

- (イ) 論文『なにかはじめべきか？』に侮辱を感じたのはたれか？……………二三
- (ロ) 新聞は集団的組織者になることができるか？……………三八

(ハ) われわれにはどのような型の組織が必要か？	一七〇
結 論	一七七
付 録 『イスクラ』と『ラボーチェエ・デーロ』の統合の試み	一八〇
『なにをなすべきか？』にたいする訂正	一八七
『イスクラ』編集局への手紙	一八八
事 項 注	一九三
人 名 注	二一〇
解 説	二二五

なにをなすべきか？

われわれの運動の焦眉の諸問題

「……党派闘争こそが、党に力と生命をあたえる。党があいまい模倣としており、はつきりした相違点がばやけていることは、その党の弱さの最大の証拠である。党は、自身を純化することによってつよくなる。……」

(一八五二年六月二十四日付ラッサールからマルクスへの手紙から)

序 文

この小冊子は、著者のはじめの計画では、論文『なに

からはじめるべきか？』(『イスクラ』^{*}第四号、一九〇一年五月)〔全集、第五巻、一一二ページ〕のなかで述べた思想をくわしく展開することにあてられるはずであった。われわれはまず第一に、右の論文のなかでした(そして、たくさん私的な問合せや手紙にこたえてくりかえした)約束の履行がおくれたことを、読者におわびしなければならぬ。昨年(一九〇一年)六月に、在外社会民主主義諸組織の全部を統合しようという試み^{***}がなされたことが、こんなにおくれた一つの理由であった。この試みがどんな結果になるかを待ってみるのが当然のことであった。というのは、この試みが成功するばあいには、おそらく、『イスクラ』の組織上の見解を述べるのにも、ややちがった視覚から行うことが必要になったろうし、いずれにせよ、それが成功すれば、ロシアの社会民主主義派内に二つの潮流が存在する状態を、非常に急速にお知らせの見込がつくわけだからである。読者のご存じのように、この試みは失敗におわった。また、のちほど立証につとめるつもりであるが、『ラボーチエ・デーロ』^{***}がその第一〇号であらためて経済主義への転換を行ったからには、これは失敗におわるほかにはなかったのである。このあいまいな、あまり明確でない、しかしそれだけにかえって根つよく、種々さまざまな形で復活しかねない傾向にた

いして、断固たる闘争をはじめることが、ぜひとも必要になった。そこで、この小冊子のはじめの計画も、これに応じて変更され、いちじるしく拡張されたのである。

本書の主要な主題は、論文『なにかからはじめるべきか?』のなかで提起した三つの問題となるはずであった。すなわち、われわれの政治的煽動の性格と主要な内容の問題、われわれの組織上の諸任務の問題、全国的な戦闘組織を同時にいろいろな地点から建設する計画の問題、この三つである。これらは、筆者がすでにずっとまえから関心をもっている問題であって、まさに『ラポーチヤ・ガゼータ』紙の復刊をいくたびか試みて失敗した、その一つの試みのさいに、筆者はすでに同紙でこれらの問題を提起しようと試みたことがあった(第五章を見よ)。しかし、はじめ私は、この小冊子では、この三つの問題を検討するだけにして、また自分の見解をできるだけ積極的な形で述べて、論戦にははいらないか、あるいはほとんどはいらないつもりだったのであるが、このはじめの予定は、二つの理由からまったく実行できないことがわかった。一方では、経済主義は、われわれが予想していたよりもずっとしぶといものであることがわかった。(われわれはここで経済主義という言葉を、『イストラ』第一二号(一九〇一年十二月)の論文『経済主義の擁護

者たちとの対話』【全集、第五卷、三八】のなかで説明しておいた、あの広い意味でもちいる。なお、右の論文は、いわば本小冊子の概要を略述したものである。この三つの問題にたいする解答にいろいろの見解があるのは、細部の点で意見がわかれていることによるというよりは、はるかに、ロシア社会民主主義派内の二つの傾向の根本的対立によるものであることが、疑う余地がなくなった。

他方では、経済主義者たちが『イストラ』紙上におけるわれわれの見解の実際上の適用について、当惑していることは、つぎの事実をはっきりとしめすものであった。すなわち、われわれがしばしば文字どおりに別々の言葉でものを言っていること、だから、ab ovo(「最初から」)はじめなければ、われわれはなに一つ了解をとげることができないこと、われわれの意見が相違している根本的な点のすべてについて、できるだけ平易に、非常に多くの具体的な実例で説明しながら、**すべての経済主義者と系統的に「話し合う」**試みをやる必要があるということである。そこで私は、そういう「話し合う」試みをやってみることに決めた。そうすると小冊子の分量をひどく大きくし、その発行をおくらせることになるのは、重々承知していたのだが、そうするよりはかに、論文『なにかからはじめるべきか?』のなかで自分があたえた約束を

はたすどういう便法も見あたらなかったのである。こうして、おくれたおわびにつけくわえて、私は、さらに、この小冊子の文章の推敲に非常な欠陥があることにについて、おわびしなければならぬ。というのは、極度にいそいで、仕事をしなければならなかったうえに、いろいろほかの仕事で中断されたからである。

さきほど述べた三つの問題の検討は、まあとおりに、この小冊子の主要な主題となっているが、しかし私は、もっと一般的な二つの問題からはじめなければならなかった。すなわち、なぜ、「批判の自由」というような「罪のない」、「当然な」スローガンが、われわれにとって真の戦闘開始の合図となっているのか？ なぜ、われわれは、自然発生的な大衆運動にたいする社会民主主義派の役割という基本的な問題についてさえ話し合いをつけることができないのか？ という問題がそれである。さらに、政治的煽動の性格と内容について見解を述べることは、組合主義的政治と社会民主主義的政治との相違を説明することに変わり、組織上の諸任務についての見解を述べることは、経済主義者がそれで足りりとしている手工業性とわれわれが必要と考える革命家の組織との相違を説明することに変わった。つぎに、全国的政治新聞の「計画」については、この計画にたいしてとなえられた異議が根

拠のないものであっただけに、また、私が論文『なにからはじめるべきか？』のなかで、どうすればわれわれはわれわれの必要とする組織の建設に、同時にあらゆる地点から着手することができらるうか、という問題を提出したのにたいして、本質に触れた解答があまり寄せられなかっただけに、なおさら私はこの計画を主張する。最後に、本書の結びの部分で、私はつぎのことをしめしたいとおもっている。すなわち、われわれは経済主義者との決定的決裂を防止するためにわれわれとしてできるだけのことはしたが、結局この決裂は避けられないものだったということ、——『ラボー・チェエ・デーロ』は、それがもつとも完全に、もつともあざやかに表現したのは、首尾一貫した経済主義ではなく、ロシアの社会民主主義派の歴史上の一時期、全体の特徴となった混乱と動揺であったことによって、特別の——なんなら「歴史的な」と言ってもいい——意義をもつようになったということ、——

——そこで、この時期を最後の清算しないかぎりわれわれは前進できないのだから、『ラボー・チェエ・デーロ』を相手どった、一見微にいり細をうがらすぎた論戦も、また意義をもつようになるということである。

エヌ・レーニン

一九〇二年二月

一 教条主義と「批判の自由」

(イ) 「批判の自由」とはなにか？

「批判の自由」——これは、たしかに、あらゆる国家の社会主義者のあいだの論争で、きわめて頻繁につかわれている、現在もつとも流行のスローガンである。ちよつと見たところでは、論争者の一方がこのようにあらたまつて、批判の自由を言いたてるくらい奇妙なことは、おもひあたらない。いったい、学問と学問研究との自由を保障しているヨーロッパの大多数の国々の憲法、法律にたいして、進歩的諸政党のあいだから反対の声でもあげられたのだろうか？ 「これはどうも少々へんだ！——」と、いたるところの街かどでくりかえされているこの流行のスローガンを小耳にはさみはしたものの、まだ論争者のあいだの意見の相違の本質を見ぬくまでになつていない局外者は、だれしも、きつとこうひとりごとするであらう。「どうやら、このスローガンは、あだ名のように、つかいつけた結果世間に通用するようになり、ほとんど普通名詞のようになる、あの符牒語の一つらしい」

と。

実際、こんにちの国際的な社会民主主義派のなかに二つの傾向ができてゐることは、知らぬものはない。この二者のあいだの闘争は、ときには燃えあがつてえんえんたる炎をはなち、ときには下火になつて感銘のふかい「休戦決議」の灰の下にくすぶつてゐる。「古い、教条主義的な」マルクス主義にたいして「批判的」態度をとつてゐるこの「新しい」傾向がなんであるかは、十分に明確にベルンシュタインが、かたり、ミルランがしめしている。

(1) ついでに言つておくが、社会主義の内部の種々の傾向のあいだの争いが、一国的なものから、はじめて国際的なものになつたということは、最近の社会主義の歴史上でほとんどただ一つの現象であり、ある点ではすこぶる心を感ずる現象である。以前には、ラッサー派とアイゼナツハ派、ゲード派と可能主義者、フェビアン派と社会民主主義者「人民の意志」派と社会民主主義者のあいだの論争は、純一国的な論争にとどまつて、純一国的な特殊性を反映し、いわばそれぞれがたつた平面で行われてゐた。現在では（いままではこれはすでに目に見えて明白である）、イギリスのフェビアン派も、フランスの人間論者も、ドイツのベルンシュタイン主義者も、ロシアの批判派も、すべてこうした連中は一族をなしてゐて、みな、たがいにほめあい、たがいにまなびあい、いっしょになつて「教条主義的」マルクス主義に驚かつてゐる。おそらく、社会主義の日和見主義とのこの最初の、真に国際的な戦闘を通じて、国際的な革命的な社会民主主義派は、すでに多年にわたつてヨーロッパを支配してゐる政治的反動の息の根をと

めることができるだけに、つよくなるであろうか？

社会民主党は、社会革命の党から民主主義的な社会改良の党に変らなければならない。こういう政治的要求をかためようと、そのまわりにベルンシュタインは、かなりほどよく調子をあわせたいいろいろの「新しい」論証や考察という砲台をずらりとめぐらした。社会主義を科学的に基礎づけ、それが必然的で不可避であることを唯物史観の見地から立証する可能性は否定された。貧困とプロレタリア化が増大し、資本主義の諸矛盾が激化しているという事実は、否定された。「終局目標」の概念そのものが破産したと宣言され、プロレタリアートの独裁の思想は無条件に排撃された。自由主義と社会主義とが原則的に対立するものであることは否定された。階級闘争、理論は、多数の意志にしたがって統治される厳密な民主主義社会には適用できないものであるという理由で、否定された、等々。

こういうふうに、革命的社会民主主義からブルジョア的社會改良主義にむかつて決定的に転換せよ、という要求に伴って、また、それにおとらず決定的な転換が、マルクス主義のすべての基本的思想のブルジョア的批判にむかつての転換が、行われたのである。ところで、このあとのほうの批判は、すでにずっとまえから、議政壇上

からも大学の講壇からも、おびただしいパンフレットのなかでも、たくさんの学術論文のなかでも、マルクス主義にたいしてくわえられてきたので、また教養ある諸階級の成長期にある子弟はみな、数十年にわたってこういう批判によって系統的に教育されていたので、いま社会主義派内の「新しい、批判的」傾向が、ちょうどミネルヴァがジュピターの頭のなかから飛びだしてきたように、いきなりすっかり完成した形で現れても、べつだん驚くにあたらないのである。この傾向は、その内容からいえば、あらためて発展させ形づくるまでもなかった。それは、ブルジョアの文獻から社会主義的文獻へ、そのままうつされてきたのである。

さらに、それでも、ベルンシュタインの理論的批判やその政治的渴望を理解できない人が、まだいたにしても、フランス人は、この「新しい方法」の実物教育の勞をとってくれた。こんどもまた、フランスは、「歴史上の階級闘争がいつでもほかのどこよりも徹底的に結末までたたかいぬかれた国」(エンゲルス——マルクスの著作『ブリュメール十八日』の序文から)であるという、その古来の名声をはずかしめなかった。フランスの社会主義者たちは、理論にふけらずに、すぐさま行動にうつった。フランスの政治的条件が民主主義の点でいっそう発達し

ているおかげで、彼らはいろいろの結果をとまなり「実践的ベルンシュタイン主義」に、いきなり移ることができた。ミルランは、この実践的ベルンシュタイン主義のすばらしいお手本をしめした。だから、ベルンシュタインでもフォルマルでも、あんなに熱心にミルランを弁護し、ほめそやしはじめたのは、それだけのいわれがあったのだ！ じっさい、もし社会民主党が、実質上改良の党にすぎず、しかもそのことを公然とみとめる勇氣を持つべきなのであるなら、社会主義者は、ブルジョア内閣にはいる権利があるばかりか、いつでもそれにはいることを目標として努力しなければならぬくらいである。

もし民主主義が、実質上階級支配の廃絶を意味するなら、社会主義の大臣が、階級協調の演説で全ブルジョア世界をうっとりさせてならないことがあろうか？ たとえ憲兵が労働者をころして、民主主義的な階級協調というものの正体を百回も、千回もしめたあとであらうとも、彼が内閣にすすわつてならないわけがあろうか？ いまではフランスの社会主義者が絞首台と革鞭と流刑の英雄(knouteur, pendeur et déporteur)としか呼んでいないツァーリの歓迎式に、彼がみずから参加してならないわけがあろうか？ ところで、社会主義が全世界の面前でこのようにはてしなく屈辱をこうむり、自分で自

分に唾をはきかけ、労働者大衆——われわれの勝利を確保することのできる唯一の土台である——の社会主義的意識を墮落させた、こうしたこの報酬というのは、貧弱な改革の鳴物いりの計画案であるが、その貧弱なことといったら、ブルジョア諸政府からでももっとましなものを獲得することができたくらいである！

わざと目をつぶらない人なら、社会主義内の新しい「批判的」傾向というのが、日和見主義の新しい変種にほかならないことを、みとめないわけにはいかない。そして、人を判断するのに、彼らが自分で身にまとったきらびやかな制服や、自分でつけた人ぎきのいい呼び名によらずに、彼らがどうふるまい、実際になにを宣伝するかによるなら、「批判的自由」とは、社会民主主義派内の日和見主義的傾向の自由であり、社会民主党を民主主義的改良党に変える自由であり、社会主義のなかにブルジョア思想とブルジョアの要素とを植えつける自由であることが明らかになるであらう。

自由とは、偉大な言葉ではある。しかし、産業の自由という旗じるしのもっとも強盗的な戦争が行われてきたし、労働の自由という旗じるしのもっとも勤労者は略奪されてきた。「批判的自由」という言葉のこんにちの使い方を見ても、その中身にはこれと同じような虚偽

がひそんでいる。自分の手で科学を前進させたと真に確信している人なら、古い見解とならんで新しい見解を出す自由ではなく、古い見解を新しい見解でおきかえることを要求するはずである。ところが、「批判の自由万歳！」というこんにちの叫びは、あまりにも空樽の寓話に似ている。

われわれは、かたく手をにぎりあい、密集した一団となって、けわしい、困難な道をすすんでいる。われわれは、四方八方から敵に包囲されていて、しょっちゅう、敵の銃火をあびながらすすまなければならない。われわれは自由意志による決定にもとづいて団結したが、それはまさに敵とたたかうためであり、足を踏みはずして隣の沼地におちこむようなことのないためである。その沼地の住人たちは、われわれがわかれて別個の集団をつくり、妥協の道棄てて闘争の道をえらんだということで、最初からわれわれを非難してきた。ところが、いまわれわれの仲間の一部のは、「あの沼地へいこう！」とさげばはじめている。そして、人が彼らをたしなめだすと、彼らは言いかえす。「君たちはなんて時代おくれの人間なのだ！ もっとよい道へ君たちをさそう自由をわれわれにみとめないなんて、君たちはいったい恥かしくないのか！」と。——いかにも諸氏よ、君たちには、他

人をさそう自由があるだけでなく、自分で、沼地であろりとどこであろりと、すぎなところへいく自由がある。われわれは、ほかならぬ沼地こそ君たちのほんとうの居場所だと、考えてさえている。だからわれわれは、君たちがそこへ移住するのに、喜んで応分のお手伝いをするつもりだ。ただ、そのときには、われわれの手をはなしてくれたまえ。われわれにつかまらないでくれたまえ、そして自由という偉大な言葉をけがすことはやめてくれたまえ。なぜといって、われわれにもまた同じように、自分のすぎなところへいく「自由」、沼地とたたかうだけでなく、沼地のほうへ向きを変えようとしている人々ともたたかう自由が、あろうというものではないか！

(ロ) 「批判の自由」の新しい

擁護者たち

ところで、ごく最近、ほかならぬこのスローガン(「批判の自由」)を、在外「ロシア社会民主主義者同盟」の機関誌である『ラボーチェ・デーロ』(第一〇号)が、しかつめらしく提出した。それも、理論的公準としてではなく、政治的要求として、「外国で活動する社会民主主義諸組織の統合は可能であるか？」という問題への回

答として、提出したのである。——つまり、「永続的な統合のためには、批判の自由が必要である」(三六ページ)というのだ。

この言明から、まったく明確な二つの結論が出てくる。それは、(一)『ラボーチュエ・デロー』は、国際社会民主主義派内の日和見主義的傾向全体の弁護にあたっているということ、(二)『ラボーチュエ・デロー』は、ロシア社会民主主義派内の日和見主義の自由を要求しているということ、である。これらの結論をしらべてみよう。

『ラボーチュエ・デロー』に「とりわけ」氣にいらな
いのは、『イスクラ』と『ザリヤー』が、国際社会民主主義派内の山岳党とジロンド党との決裂を予言したがる傾向をもっていることである。

(1) 革命的プロレタリアートのなかの二つの潮流(革命的な潮流と日和見主義的な潮流)を、十八世紀の革命的ブルジョアジーのなかの二つの潮流(ジャコバン派——すなわち、「山岳党」——とジロンド派)になぞらえることは『イスクラ』(第二号(一九〇一年二月)の主張のなかでなされたことである。この論説の筆者はブレハノーフである。ロシア社会民主主義派内の「ジャコバン主義」をかけたことは、カデツも、「ベズザラヴツィ」も、メンシエヴィキも、こんにち
にいたるまで、大すぎである。しかし、この概念は、ブレハノーフが
はじめて社会民主主義派の右翼に対抗して提出したものだという点に
ついては、このごろでは、人々は、むしろ沈黙をまもるか、あるいは
……わすれたがっている。(一九〇七年版への原注)

『ラボーチュエ・デロー』の編集局員ベ・クリチュエフスキーは書いている。「社会民主主義派の隊列のなかに山岳党とジロンド党があるなどというこのお談義は、全体としてわれわれには、マルクス主義者の筆になるものとしては奇妙な、皮相な歴史的類比であるようにおもわれる。山岳党とジロンド党とは、観念学者風の歴史家たちの目にはそううつるかもしれないが、ちがった氣質とか思潮とかを代表したものでなくてはなくて、ちがった階級または層を——つまり一方は中ブルジョアジーを、他方は小ブルジョアジーとプロレタリアートを、代表したのである。ところが、こんにちの社会主義運動のなかには階級利害の衝突というようなものはない。この運動全体が、世にもかくれないベルンシュタイン主義者までもふくめて、そのすべての(傍点)ベ・クリチュエフスキー)変種をあげて、プロレタリアートの階級利害の基盤に、政治的および経済的解放をめざすプロレタリアートの階級闘争の基盤に立っている。」(三二—三三ページ)

なんと大胆な主張だろう！ベルンシュタイン主義がこんなに急速にひろまったのは、近年、社会主義運動に「学者」層がひろく参加してきた、まさにそのことによって確保されたものだという、すでにずっとまえからみ

とめられている事実を、ベ・クリチエフスキーは耳にしたことがないのだろうか？ だが、肝心なことは、こうである。わが筆者は、「世にもかくれのないベルンシュタイン主義者」までがプロレタリアートの政治的および経済的解放をめざす階級闘争の基盤に立っている、というその意見を、なにを根拠にして立てているのだろうか？ なんてあるかはわからない。世にもかくれのないベルンシュタイン主義者を断固として弁護しているが、それはまったくどういふ論拠によっても、どういう考察によっても、裏づけていないのだ。あきらかに筆者は、世にもかくれのないベルンシュタイン主義者たちが、自分にしてしていることをくりかえして言いさえすれば、自分の主張を証明するまでもないと考えているようだ。だが、このように、一傾向全体を判断するのに、その傾向の代表者たちが自分の言い分として根拠にしているというくらい「皮相な」ことを、考えることができるだろうか？ そのさきにつづいて述べられている、二つのあい異なる、正反対でさえある党発展の型または道についての「お説教」(『ラボーチェ・デーロ』三四—三五ページ)くらい皮相なことを、考えることができるだろうか？ それは、ドイツの社会民主主義者は批判の完全な自由をみとめているではないか、他方、フランス人

はそれを見とめないが、ほかならぬこのフランス人の実例が、「偏狭の害悪」をあますところなくしめしている、というのである。

われわれはこれにこうこたえよう。ほかならぬベ・クリチエフスキーの実例が、歴史を文字どおり「イロヴァイスキー流に」観察する人々でさえも、ときにはマルクス主義者と自称することがあるのを、しめしている、と。ドイツの社会主義党が統一していてフランスの社会主義党が細分している理由を説明するためには、それぞれの国の歴史の特殊性を掘りさげたり、軍事的半絶対主義の諸条件と共和主義的議会制度の諸条件とを対比したり、パリ・コミューンの結果と社会主義者取締法の結果とを検討したり、経済生活や経済的発達を比較したり、「ドイツ社会民主党の比類のない成長」⁽¹⁾には、理論上の謬見(ミュールペルガー、デューリング、講壇社会主義者)だけでなく、また戦術上の謬見(ラッザール)にたいする、社会主義の歴史上に比類のない精力的闘争が伴っていたことをおもいだしたり、等々する必要は全然ない。そんなことはみなよけいなことだ！ フランス人があらそっているのは、彼らが偏狭だからで、ドイツ人が統一しているのは、彼らがお利口さんだからだ、というのだ。

(1) エンゲルスがデューリングをやったときには、ドイツ社会